

精神保健福祉援助実習における 学生の達成動機の変化に関する研究

大西 良¹⁾・辻丸秀策¹⁾・藤島法仁²⁾・占部尊士²⁾
大岡由佳²⁾・末崎政晃²⁾・福山裕夫¹⁾

Study to transit of achievement motivations in psychiatric social worker's training

Ryo OHNISHI, Shusaku TSUJIMARU, Norihito FUJISHIMA,
Takashi URABE, Yuka OOKA, Masaaki SUEZAKI, Hiroo FUKUYAMA

【抄録】本研究の目的は、精神保健福祉援助実習前後での実習生の達成動機の変化を明らかにするとともに、達成動機に影響を与える要因について検討することであった。調査の結果、①自己充實的達成動機の平均値は実習前で51.72点、実習後で53.33点であり、実習後に上昇することが示された。また、非参加群との比較においても両群の間に有意な差が認められ、参加群で自己充實的達成動機が高いことが明らかとなった。②競争的達成動機の平均値は実習前で33.13点、実習後で33.62点であり、実習前後では有意な変化は認められなかった。しかし、非参加群との比較においては両群の間に有意な差が認められ、参加群で競争的達成動機が高いことが明らかとなった。③実習生の達成動機に影響を与える要因として、「実習に対する不安」と「精神保健福祉ボランティア等の事前体験学習の有無」の2つの項目で関連性が認められ、実習不安が高いほど「自己充實的達成動機」は低下し、また、精神保健福祉ボランティア等の事前体験学習を経験した学生で「自己充實的達成動機」が上昇することが明らかとなった。

以上の結果を踏まえて、実習において達成動機（特に自己充實的達成動機）を高める可能性のある目標設定モデルを用いた現場実習指導のあり方、さらには学生への教育的支援の方法について論じた。

【キーワード】精神保健福祉援助実習 達成動機 目標設定 実習評価

はじめに

精神保健福祉援助実習（以下、「現場実習」とする）の学習目標については、「精神保健福祉士短期養成施設および精神保健福祉士一般養成施設等指定規則」において、①現場体験を通して精神保健福祉士として必要な知識および技術ならびに関連知識の理解を深めること、②精神保健福祉士として必要な知識および関連知識を実際に活用し、精神障害者に対する相談援助およびリハビリテーションについて必要な資質・能力・技術を習得すること、③職業倫理を身につけ、援助者としての自覚に基づいた行動ができるようにすること、④具体的な体験や援助活動を専門的援助技術として概念化し理論化し体系立

てていくことができる能力を涵養すること、⑤関連分野の専門職種との連携のあり方を理解すること、などが示されている。

上記の目標を具体化したものとして、荒田¹⁾は①精神障害者が置かれている現状を理解し、その生活上の実態や困難について把握するとともに、当事者のニーズを理解すること、②ケースワーク、グループワークなどの実際を通して、精神障害者に対する専門職としての援助関係のあり方や問題解決の基礎的な方法を学ぶこと、③機関・施設の役割と機能を学び、精神保健福祉士の業務および社会資源や他機関との連携のあり方を理解すること、④精神保健ボランティアやセルフ・ヘルプグループなどのサポートシステムについて理解すること、⑤専門職の倫理

¹⁾久留米大学 文学部社会福祉学科

²⁾久留米大学大学院 比較文化研究科

や人権擁護などの姿勢と、専門職のソーシャルワーク実践の能力を学び、当事者（精神障害者やその家族）とのふれ合いにより自己理解を深めて自己の課題を認識することなどの5つを挙げている。また、森²⁾は、①学内で学習したことの統合化、②専門職への接近、③対象者理解の深化の3つを重要な達成目標として示している。

つまり、現場実習では精神障害者の生活上のニーズを把握することや他機関・他施設と連携を図り個別支援や集団あるいはコミュニティに対する支援方法を学ぶことに加え、専門職としての姿勢や心構えなどの専門職としての価値や態度を身に付け、自己理解を深めていくことが学習目標とされている。さらに現場実習での重要なねらいとして、学生がこれまでに学んできた知識・技術・価値などと現場での実体験との統合化を図ることを通して、将来、福祉専門職として活動する際のイメージ化を図る意味もあろう。

以上のように、精神保健福祉を志す学生が、現場実習でどのような体験をし、その体験をどのように根付かせているのか、また、現場実習での達成感や達成内容にどのような特徴と変化がみられるのかを検討することは、精神保健福祉養成教育の重要なテーマであると考えられる。

このような問題意識から、本研究では、現場実習における学生の達成動機の変化を明らかにするとともに、達成動機に影響を与える要因について検討することが目的である。

なお、本研究では現場実習における実習生の特徴をより明確にするために、現場実習への参加群と非参加群の2つの群を設定して比較検討することも試みた。

対象と方法

1. 調査対象

本研究では、4年制大学の学生で現場実習に参加した学生39名（以下、「参加群」とする）と、同大学の学生で現場実習に参加しなかった学生30名（以下、「非参加群」とする）を調査対象とした。

なお、両群の内訳は、参加群では男子学生11名、女子学生28名であり、非参加群では男子学生13名、

女子学生17名であった。

2. 調査時期

参加群への調査は2007年5月～2007年10月にかけて、個別の学生の実習時期に合わせて実施した。また、非参加群への調査は、2007年7月に実施した。

3. 調査内容と手続き

本研究で用いた調査用紙は2部構成となっている。第1部はフェースシート、第2部は達成動機を尋ねる内容であった。具体的な調査項目と尺度の説明については以下に示す。

1) フェースシート

フェースシートの部分では、実習生の性別、年齢などの基本属性に加え、「実習に対する不安」「友人、教員、現場実習指導者のサポート」「実習中の相談相手の有無」「精神保健福祉分野での就労、仕事内容への魅力」「実習での不快な体験の有無」「精神保健福祉ボランティア等の事前体験の有無」といった現場実習に関する基礎的な内容の質問項目を設けた。

なお、有無を尋ねる設問については、「あった」「なかった」の2件法で評定を行い、その他の設問については、「とてもそうであった」「ややそうであった」「あまりそうではなかった」「まったくそうではなかった」の4件法で評定を行った。

2) 達成動機尺度

達成動機尺度とは、価値ある仕事に挑戦し、それを成し遂げようとする傾向を測定する尺度である。本研究では、堀野³⁾⁴⁾⁵⁾が、「ものごとを最後までやり遂げない」「困難なことも挑戦し、成功させたい」という達成動機を、個人と社会の2つの側面で捉えることを目的として作成した尺度を使用した。

この達成動機尺度の特徴は、「自己充實的達成動機」と「競争的達成動機」の2つの下位因子からできており、「自己充實的達成動機」に関する項目は13項目、「競争的達成動機」に関する項目は10項目で、全23項目で成り立っている。測定方法は、7件法（「非常によくあてはまる」：7点、「ほとんどあてはまる」：6点、「少しあてはまる」：5点、「どちらともいえない」：4点、「あまりあてはまらない」：

3点,「ほとんどあてはまらない」: 2点,「全然あてはまらない」: 1点)により評定ならびに配点を行った。

なお,「自己充實的達成動機」と「競争的達成動機」の2つの下位因子の具体的な項目内容についてはTable. 1に示す。

また,調査の手續きとしては,調査用紙の配布と回収は,参加群へは学生各々の実習時期に合わせて,実習開始日1週間前(実習前)と実習終了日から1週間後(実習後)の2度実施した。非参加群へは,講義の中で調査用紙の配布と回収を行った。

4. 分析方法

達成動機尺度の信頼性と妥当性を検討するために,主成分分析(プロマックス回転)による成分抽出を行い,その抽出された因子についてはCronbackの α 係数を用いて内の一貫信頼性を求めた。その後,現場実習前後での達成動機の変化ならびに非参加群

との比較を行うために,対応のあるt検定および独立サンプルのt検定を実施した。

また,達成動機尺度の下位因子とフェースシートで尋ねた質問項目との関連性を明らかにするために, χ^2 乗検定と一元配置分散分析を行った。なお,いずれの統計学的解析においても5%以下の危険率を有意差とした。

以上の集計および解析では,Microsoft Excel 2003ならびにSPSS13.0J for Windowsの統計ソフトを使用した。

5. 倫理的配慮

調査対象者に対しては,調査への協力依頼文書の中で,現場実習をより効果的に行えるための調査である旨を記載した。さらに,本調査はあくまでも任意であり,成績や実習評価とは一切関係しないこと,回答した結果はコンピュータによって処理され,個人の回答が外部に知らされることはなく,結果は学

Table. 1 達成動機尺度

自己充實的達成動機項目	
他者・社会の評価にはとらわれず,自分なりの達成基準への到達を目指す達成動機	
1	いつも何か目標を持っていたい
2	決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい
3	人と競争することより,人と比べることができないようなことをして自分をいかしたい
4	ちょっとした工夫をすることが好きだ
5	人に勝つことより,自分なりに一生懸命やるのが大事だと思う
6	みんなに喜んでもらえるすばらしいことをしたい
7	何でも手がけたことには最善をつくしたい
8	何か小さなことでも自分にしかできないことをしていたいと思う
9	結果は気にしないで何かを一生懸命やってみたい
10	いろいろなことを学んで自分を深めてみたい
11	今日一日何をしようかと考えることは楽しい
12	難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う
13	こういうことがしたいなあと思えるとワクワクする
競争的達成動機項目	
他者をしのぎ,他者に勝つことで社会から評価されることを目指す達成動機	
1	ものごとは他の人よりうまくやりたい
2	他人と競争して勝つとうれしい
3	競争相手に負けるのはくやしい
4	どうしても私は人より優れていたいと思う
5	勉強や仕事を努力するのは,他の人に負けないためだ
6	今の社会では,強いものが出世し,勝ち抜くものだ
7	就職する会社あるいは病院は,社会で高く評価される場所を選びたい
8	成功するということは,名誉や地位を得ることだ
9	社会の高い地位を目指すことは重要だと思う
10	世に出て成功したいと強く願っている

術的な目的以外には使用しないことを明記した。

また、調査対象者へは調査結果を個別にフィードバックして、実習後での自己評価や振り返りのための自己学習の一指標として役立ててもらった。

6. 用語の説明と操作的定義

達成動機については、多くの研究者によって検討がなされ、理論的にも多様である。そのため、ここでは先行研究を振り返ることで、達成動機概念を整理し、本研究で用いる定義を明確にしておく。

心理学辞典によると、Murray は達成動機について「困難なことを遂行し、自然、人間、思想を支配および組織すること、またこれらをできるだけ早く自力で行うこと、困難を克服し高い水準に達すること、才能をうまく使って自尊心を高めること」⁹⁾と定義している。また、McClelland らはこのMurray の定義を基盤におき、自らが開発した投影法を用いて被験者が達成的であると評価する基準として、①卓越の水準を競うこと、②独自の達成を目指すこと、③長期的に達成目標に関わることの3点を達成動機の定義として示している⁷⁾⁸⁾。

その後、この2つの定義については、多くの検討がなされ、現在では大きく2つの立場で論じられている。1つは、期待と価値を重視する立場である。これは、達成動機を「行動によってもたらされる結果への期待の強さと、結果に対する個人の価値の高さによって決定されるもの」⁹⁾と定義するものである。もう1つは、目標を重視する立場である。この立場では、達成動機を「自ら目標を定め、自らを動機づけするものであり、他者や自己からの高い評価を得るための目標と、自らの可能性を伸ばすための目標とに区別でき、個人においていずれの目標が支配的となるかによって決定されるもの」⁹⁾と定義するものである。この両者のどちらにおいても、達成動機の根源は物事を達成する際の欲求を満たすことができるか否かによって決まるものとされている。

以上のような定義があるが、本研究では、精神保健福祉援助実習に参加する学生を対象とし、また、実習の目標や課題を検討することを目的とすることから、後者の「目標を重視する立場」に依拠して論を進めることにする。

結果

1. フェースシートの設定項目の集計結果

ここではフェースシートで尋ねた質問項目について、集計した結果をそれぞれに示す。

まず、「実習に対する不安」では、「とても感じていた」が51.3%、「少し感じていた」が48.7%で、ほぼ全員が実習に対する不安を抱えていた(Table. 2)。

Table. 2 実習に対する不安について

	とても感じていた	少し感じていた	あまり感じていなかった	まったく感じていなかった
実習に対する不安	51.3	48.7	0	0
N=39				

つぎに「実習中の相談相手の有無」については、「相談相手がいた」と回答した学生は9割以上(92.2%)であった(Table. 3)。

Table. 3 実習中の相談相手の有無について

	いた	いなかった
実習中の相談相手の有無	92.2	7.8
N=39		

「実習中の人的サポート」については、「友人からのサポートを多く得ることができた」と「得ることができた」を合計すると83.2%となり、約8割以上の学生が実習中に友人からのサポートを得ることができたと回答していた。また、「教員からのサポート」、「現場指導者からのサポート」についても、「多く得ることができた」と「得ることができた」を合計すると、9割以上の学生でサポートを得ることができたと回答していた(Table. 4)。

Table. 4 実習中の人的サポートについて

	多く得ることができた	得ることができた	あまり得ることができなかった	まったく得ることができなかった
友人のサポート	54.6	28.6	13	5.2
教員のサポート	52	41.6	7.8	0
現場指導者のサポート	44.2	49.4	5.2	2.6
N=39				

「精神保健福祉ボランティア等の事前体験学習の有無」については、約7割（70.2%）の学生で事前にボランティア等の事前学習の機会を得ていた（Table. 5）。

Table. 5 精神保健福祉ボランティア等の事前体験学習の有無について

	あった	なかった
精神保健福祉ボランティア等の事前体験の有無	70.2	31.2

N=39

「精神保健福祉分野での仕事内容に関する魅力」、
「精神保健福祉分野での就労に関する魅力」については、どちらもほぼ全員の学生で魅力を感じていた（Table. 6）。

Table. 6 精神保健福祉分野での仕事内容、就労に関する魅力

	とても魅力がある	魅力がある	あまり魅力がない	まったく魅力がない
精神保健福祉分野の仕事内容に関する魅力	51.3	48.7	0	0
精神保健福祉分野での就労に関する魅力	48.7	48.7	2.6	0

N=39

「これまでの実習経験での不快体験の有無」については、「ある」が66.7%、「ない」が33.3%で、約6割以上の学生で不快な体験をした経験があると答えていた（Table. 7）。

Table. 7 これまでの実習経験での不快体験の有無について

	ある	ない
これまでの実習での不快体験の有無	66.7	33.3

N=39

2. 達成動機尺度の信頼性・妥当性

本研究で用いる達成動機尺度の信頼性・妥当性を検討するために、主成分分析（プロマックス回転）を行って成分の抽出をしてから Cronbach の内の一貫信頼性（ α 係数）を求めた。その結果、先行研究で示されている通り、「自己充實的達成動機」と「競争的達成動機」の2つの下位因子に分けられる

ことができ、Table. 8 に示すようにそれぞれの α 係数も0.89, 0.73と高い信頼性が確認された。

よって、その後の分析では、この2つの下位因子を用いて検討を行うことにする。

Table. 8 達成動機尺度の内の一貫信頼性（ α 係数）

因子項目	項目数	α 係数
自己充實的達成動機	13	0.89
競争的達成動機	10	0.73

3. 達成動機尺度の全項目（23項目）の実習前後での変化

達成動機尺度の各項目の平均値（標準偏差）と対応のある t 検定の結果を示したものが Table. 9 である。

現場実習前後での変化については、「いつも何か目標を持っていたい」（ $t(38)=3.23$ $p<0.01$ ）、「何でも手がけたことには最善をつくしたい」（ $t(38)=2.10$ $p<0.05$ ）、「難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う」（ $t(38)=2.09$ $p<0.05$ ）の3つの項目で統計的に有意な変化が認められ、実習後に数値の上昇がみられた。

なお、この3つの項目はいずれも「自己充實的達成動機」の内容であった。

4. 達成動機尺度の2つの下位因子の変化

つぎに達成動機尺度の下位因子である「自己充實的達成動機」と「競争的達成動機」の合計得点の平均値を算出し、現場実習前後での変化を比較した。また、実習後での両下位因子の合計得点と非参加群の合計得点の平均値とについては平均値の差を検討した。

まず、「自己充實的達成動機」の合計得点の平均値については、実習前で51.72点、実習後で53.33点であった。実習前後で統計的に有意な変化が認められ（ $t(38)=2.50$ $p<0.05$ ）、実習後に上昇することが示された。

また、参加群の実習後と非参加群との平均値を比較したところ、両者の間に有意な差が認められた（ $t(66)=13.52$ $p<0.01$ ）。

つまり、現場実習に参加した学生の「自己充實的

Table.9 達成動機尺度の項目ごとの平均値(標準偏差)とt検定の結果

	実習前		実習後		平均値の差 (実習後- 実習前)	t 値	有意差
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
1 いつも何か目標を持っていたい	4.13	0.64	4.67	0.49	0.54	3.23	**
2 ものごとは他の人よりうまくやりたい	4.13	0.64	4.07	0.70	-0.06	0.43	
3 決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい	3.80	0.86	3.87	0.64	0.07	0.37	
4 人と競争することより、人と比べることができないようなことをして自分をいかしたい	3.80	0.78	3.80	0.41	0.00	0.00	
5 他人と競争して勝つとうれしい	4.00	0.54	4.00	0.38	0.00	0.00	
6 ちょっとした工夫をすることが好きだ	3.60	0.91	3.87	0.64	0.27	1.00	
7 人に勝つことより、自分なりに一生懸命やるのが大事だと思う	4.20	0.68	4.33	0.82	0.13	0.69	
8 みんなに喜んでもらえるすばらしいことをしたい	4.20	0.86	3.93	0.96	-0.27	1.00	
9 競争相手に負けるのはくやしい	3.93	0.59	3.93	0.59	0.00	0.00	
10 何でも手がけたことには最善をつくしたい	4.20	0.56	4.83	0.63	0.63	2.10	*
11 どうしても私は人より優れていたと思う	3.07	0.88	3.13	0.74	0.06	0.22	
12 何か小さなことでも自分にしかできないことをしていたと思う	4.13	0.64	4.13	0.52	0.00	0.00	
13 勉強や仕事を努力するのは、他の人に負けないためだ	2.60	0.91	2.47	0.74	-0.13	0.62	
14 結果は気にしないで何かを一生懸命やってみたい	4.13	0.64	4.20	0.56	0.07	0.32	
15 今の社会では、強いものが出世し、勝ち抜くものだ	3.40	0.83	2.93	0.88	-0.47	1.52	
16 いろいろなことを学んで自分を深めてみたい	4.27	0.59	4.47	0.52	0.20	0.90	
17 就職する会社あるいは病院は、社会で高く評価される場所を選びたい	3.40	0.74	3.27	0.59	-0.13	0.81	
18 成功するということは、名誉や地位を得ることだ	2.27	0.80	2.53	0.83	0.26	0.89	
19 今日一日何をしようかと考えることは楽しい	3.60	0.91	3.60	0.74	0.00	0.00	
20 社会の高い地位を目指すことは重要だと思う	3.40	0.83	3.67	0.62	0.27	1.17	
21 難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う	3.73	0.80	4.27	0.59	0.54	2.09	*
22 世に出て成功したいと強く願っている	3.13	0.74	3.33	0.82	0.20	0.68	
23 こういうことがしたいなあと思えるとわくわくする	3.73	0.80	3.93	0.88	0.20	0.90	

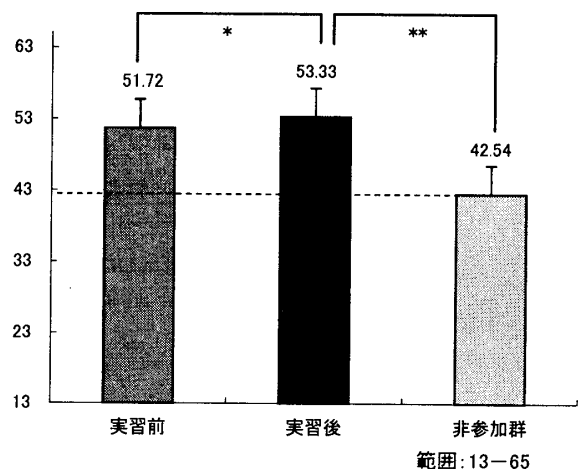
** p<.01 * p<.05

達成動機」は実習後に上昇し、それは実習に参加していない学生と比べ明確な差となって表れていることが示された。

つぎに、「競争的達成動機」の合計得点の平均値については、実習前で33.13点、実習後で33.62点であった。この実習前後での変化についての有意差は認められなかった ($t(38)=1.02$ 有意差なし)。

また、参加群の実習後と非参加群との平均値を比較したところ、両者の間に有意な差が認められた ($t(66)=11.52$ $p<0.01$)。

つまり、実習に参加した学生の「競争的達成動機」は、実習によっては変化しないものの、実習に参加していない学生と比べ明確な差となって表れていることが示された。



** p<0.01 * p<0.05

Figure.1 「自己充實的達成動機」の実習前後比較と非参加群との比較

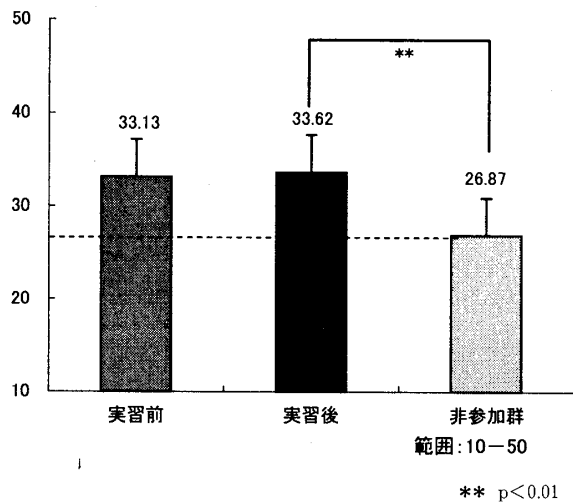


Figure. 2 「競争的達成動機」の実習前後比較と非参加群との比較

5. 実習生の達成動機に影響を与える要因の分析

ここでは、上述した結果を踏まえて達成動機に影響を与える要因について検定を加えた結果を示す。まず、実習前後で有意な変化が認められた「自己充實的達成動機」を従属変数、フェースシートで尋ねた項目を独立変数として、両者の関連性を検討した。両者の関連性を明らかにするために χ^2 乗検定ならびに一元配置分散分析を行った結果、「実習に対する不安」($F(1, 37)=8.52$ $p<0.01$)、「精神保健福祉ボランティア等の事前体験学習の有無」(χ^2 乗=

3.12 $p<0.05$)の2つの設問で関連性が確認され、実習不安が高いほど「自己充實的達成動機」は下降すること、また、精神保健福祉ボランティア等の事前体験学習を経験した学生で「自己充實的達成動機」が上昇することが明らかとなった。

考察

1. 実習生の達成動機の特徴

本研究から、実習生の自己充實的達成動機については実習後に上昇することが示され、非参加群との比較においても参加群の方が自己充實的達成動機が高いことが明らかとなった。また、競争的達成動機については、実習前後では有意な変化はみられなかったものの、非参加群との比較では、参加群の方で競争的達成動機が高いことが明らかとなった。さらに、実習生の達成動機に影響を与える要因については、自己充實的達成動機と「実習に対する不安」、「精神保健福祉ボランティア等の事前体験学習の有無」の2つの項目で有意な関連性が認められ、実習不安が高いほど「自己充實的達成動機」は低下し、また、精神保健福祉ボランティア等の事前体験学習を経験した学生で「自己充實的達成動機」が上昇することが示された。

そもそも達成動機は、社会的動機の一つであり、

Table. 10 達成動機に影響を与える要因の分析結果

No.	自己充實的達成動機		
	χ^2 乗値	F 値	有意差
1 実習に対する不安	—	8.52	**
2 友人のサポート	—	0.44	n.s.
3 教員のサポート	—	2.31	n.s.
4 現場指導者のサポート	—	0.36	n.s.
5 精神保健福祉ボランティア等の事前体験の有無	3.12	—	*
6 精神保健福祉分野の仕事内容に関する魅力	—	1.08	n.s.
7 精神保健福祉分野での就労に関する魅力	—	0.33	n.s.
8 実習中の相談相手の有無	0.31	—	n.s.
9 実習での不快体験の有無	0.65	—	n.s.

#1: 「実習不安」「友人のサポート」「教員のサポート」「現場指導者のサポート」「精神保健福祉分野の仕事内容に関する魅力」「精神保健福祉分野での就労に関する魅力」については、分散分析 (F 値) の結果を示している。

#2: 「精神保健福祉ボランティア等の事前体験の有無」「相談相手の有無」「実習での不快体験の有無」については、 χ^2 乗検定 (χ^2 乗値) の結果を示している。

** $p<0.01$ * $p<0.05$

ある設定された目標を成し遂げようと考え、行動を示すものとして、特に教育学の分野で学習意欲や学習成果と関連づけて研究されてきている。堀野¹⁰⁾は、達成動機の要素として従来の競争的達成動機に加えて、自己充實的達成動機が重要であると考え、この両方の側面から達成動機の強さを測定してきた。小口ら¹¹⁾の研究によると、成人した個人の動機は、それ自体自己充實的な力動性を持つものであり、自分自身が考える目標や課題に向かって努力し、その目標や課題を達成できたことに対して満足感や充実感を感じるものであると指摘しており、本調査においても自己充實的達成動機の向上がみられたことは、学生が目標意識を持って実習に望んだ結果であると言える。また、ソーシャルワーカーあるいは看護師などの対人援助職に求められる自己実現の欲求¹²⁾には自己充實的達成動機が必要不可欠であり、対人援助職が援助者として行動する際の原動力に繋がるものとも言えるため、学生は実習によって対人援助職の満足感や充実感を感じ取り、自己実現のための過程を学習することができたと考えられる。

しかしながら、広い意味で、達成動機は個人の積極的価値に基づく「個人的達成欲求」と社会的、文化的に価値のあることを達成する「社会的達成欲求」の2側面を捉えるものであり、どのような成功に対して自己の達成動機を表現するかは、それぞれ個人において異なり、成功という結果のみを重視することは危険である¹³⁾と指摘されている。

このことから、達成動機に関連した教育的関与においては、結果のみを重視するのではなく、その過程に注目する必要がある。また、競争的達成動機を望ましくない動機として受け止めるのではなく、競争的達成動機の低い学生に対して教育的配慮をす

ると共に、その意識が高い学生への支援も考慮しなければならない。堀野¹⁰⁾によれば、自己充實的達成動機の高い人は、他者からの援助を受け入れ、そして他者を援助したいと思ひ、失敗に対する柔軟性があり、プロセス重視の基本的学習観をもっているとされていることから、それぞれの学生の特徴を捉え、競争的達成動機と自己充實的達成動機の状態を見極めた教育的支援を行うことが必要であろう。

2. 実習における目標（課題）の具体的内容

自己充實的達成動機と競争的達成動機を検討する上での重要な視点として目標の設定が考えられる。

Locke et al¹⁴⁾¹⁵⁾は人が内発的に動機付けられるためには、目標が非常に重要な要因となる、目標設定モデルが重要であると指摘している。この目標設定モデルでは、「目標の困難さ」と「目標の明確さ」の2つが鍵を握る¹⁶⁾とされている。困難さとは目標の達成が容易ではないこと、明瞭さとは、何をどのようにすべきであるかが明らかであることである。つまり、目標がその人のモチベーションを高めるのは、努力しなければならないと思ひ、そのためには何をすれば良いかが明瞭に理解でき、しかも達成された状態を想像することによって、自己効力感を醸成できる場合である。そのため、目標とは、与えられるのではなくその設定に自ら参画することが欠かせられないことが前提となる。

実習生が実際に設定した実習目標を Table. 11 に示す。実習生の実習目標を分類すると大きく4つに分類することができる。①「利用者に対する対応や面接の技法の理解について」や「ソーシャルワークにおける介入の方法について」など『援助技術の理解』、②「精神保健福祉士として、病棟とデイケア

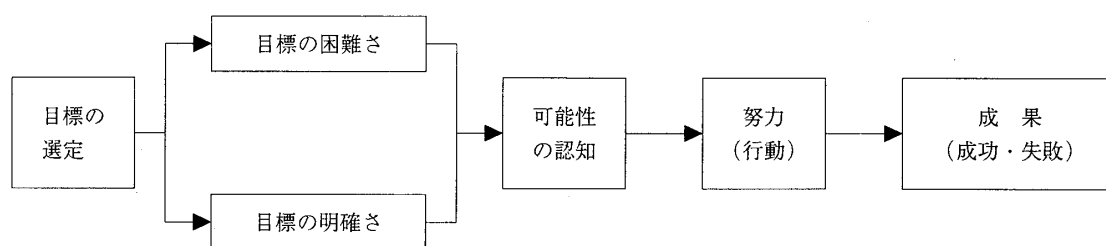


Figure. 3 目標設定モデルにおける達成動機

での仕事内容の違いを知ること」や「精神保健福祉士の業務について理解すること」などの『実務の理解』、③「自分自身の性格、価値観を改めて振り返ること」や「自分の悪い部分ばかり見るのではなく、良い点を評価するという姿勢を身につけること」などの『自己・他者の理解』、④「病院における精神保健福祉士の役割の理解について」や「精神保健福祉士以外の職種の役割や連携について」などの『専門性の理解』である。

このような実習生の具体的な目標内容を吟味する際、目標の明確性と困難性を考慮しながら各実習生に合致した目標の設定が重要となる。また、精神保健福祉学生達の達成動機を発展させるための教育的関与の方向性としては、事前の目標設定の段階から教

員の積極的関与が必要であり、精神保健福祉を学ぶ学生としての誇りをより自覚させること、福祉専門職の仕事のやりがいを意識づけることによって、達成動機を強化することが可能になると考える。

3. 本研究の限界と今後の課題

本研究での対象者は39名と数に制限があり、データの一般性に関する問題が挙げられる。しかしながら本研究結果は、必ずしもすべての実習生に当てはまるものではないが、実習生の現状を把握する上である程度の代表性を確保できたと考える。

本研究では、精神保健福祉援助実習に参加した学生の達成動機に対する自己評価と影響要因の内容が明らかになったが、今後、その学生の評価の背後に

Table. 11 実習生の目標（課題）の具体的内容

分類	目標（課題）内容
援助技術の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者に対する対応や面接の技法の理解について ・ソーシャルワークにおける介入の方法について ・カルテやケース記録などの記録の方法について ・クライアントと接する場合、普通通りの接し方で良いということ ・SSTなどの社会復帰に向けたリハビリプログラムについて ・クライアントとのコミュニケーションの取り方について
実務の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・精神保健福祉士として、病棟とデイケアでの仕事内容の違いを知ること ・精神保健福祉士の業務について理解すること ・精神保健についての幅広い知識を得ることができたこと ・教科書だけではわからないその場独自の仕事内容を理解すること ・精神科病院の現状を理解すること ・ケース記録を作成すること ・様々な職種の支援の様子について知ること ・精神保健福祉士の本来の仕事内容（インテークやアセスメントなど）について学ぶこと
自己・他者の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・自分自身の性格、価値観を改めて振り返ること ・自分の悪い部分ばかり見るのではなく、良い点を評価するという姿勢を身につけること ・利用者との接し方について常日頃から考えること ・クライアントが退院に向けて、日常的にどのような取り組みをしているのかを知ること ・クライアントの本音や思いを実際に聞くこと ・疾患や障害の特徴の理解について ・自分なりの支援方法を深めること
専門性の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・病院における精神保健福祉士の役割の理解について ・精神保健福祉士以外の職種の役割や連携について ・クライアントとのコミュニケーションを図り、専門的な視点を持つこと ・ソーシャルワーカーとしての独自の視点について理解すること

ある様々な要因を明らかにする必要がある。さらにその上で、学生の現状を踏まえた効果的な教育支援が提供できる体制作りや具体的な支援方法の検討も必要とされるであろう。

まとめ

本研究では、精神保健福祉援助実習前後での実習生の達成動機の変化を明らかにし、達成動機に影響を与える要因について検討することが目的であった。

調査の結果、①自己充實的達成動機の平均値は実習前で51.72点、実習後で53.33点であり、実習後に上昇することが示された。また、非参加群との比較においても両群の間に有意な差が認められ、参加群で自己充實的達成動機が高いことが明らかとなった。②競争的達成動機の平均値は実習前で33.13点、実習後で33.62点であり、実習前後では有意な変化は認められなかった。しかし、非参加群との比較においては両群の間に有意な差が認められ、参加群で競争的達成動機が高いことが明らかとなった。③実習生の達成動機に影響を与える要因として、「実習に対する不安」と「精神保健福祉ボランティア等の事前体験学習の有無」の2つの項目で関連性が認められ、実習不安が高いほど「自己充實的達成動機」は低下し、また、精神保健福祉ボランティア等の事前体験学習を経験した学生で「自己充實的達成動機」が上昇することが明らかとなった。

以上を踏まえて、実習において達成動機（特に自己充實的達成動機）を高める可能性のある目標設定モデルを用いた現場実習指導のあり方、さらには学生への教育的支援の方法について考察した。

文献

- 1) 荒田寛：「精神保健福祉援助実習」への期待と今後の検討課題。精神保健福祉，2001；第32巻第1号（通巻45号）：9-12.
- 2) 森法房：基礎実習の展開と課題～動機づけの強化と問題意識の醸成～。山口県立大学社会福祉学部紀要，2000；第6号：11-20.
- 3) 堀野緑：達成動機の構成因子の分析－達成動機概念の再検討－。教育心理学研究，第35号：148-154，1987
- 4) 堀野緑：勢力動機の二面性とソーシャルサポートの関係。教育心理学研究，第39号：419-425，1991
- 5) 堀野緑・森和代：抑うつとソーシャルサポートと関連に介在する達成動機の要因。教育心理学研究。教育心理学研究，第39号：308-315，1991
- 6) 中島義明・安藤清志・子安増生編著：心理学辞典，83-86および141-170，有斐閣，1999
- 7) 宮本美砂子・奈須正裕編：達成動機の理論と展開～続・達成動機の心理学～。1-71，金子書房。1995
- 8) McClelland D.C. Atkinson J.W. Clark R.A. et al : The Achievement Motive, Appleton-Century-Crofts. Inc New York, 319-333, 1953
- 9) 宮本美砂子・岡野和子・依田新：達成動機の育成とその規定因，教育心理学年報，第8集，68-75：1968
- 10) 堀野緑：達成動機の心理学的考察，風間書房；103-107，1994
- 11) 小口忠彦・早坂泰次郎：動機づけの心理学。明治図書；51，1972
- 12) 庄司順一・西澤哲編：社会福祉基礎シリーズ12巻 ソーシャルワーカーのための心理学。有斐閣，29；2001
- 13) 佐伯胖：学力と思考，教育学大全集，第一法規；1982
- 14) Locke, E.A., Cartledge, N., Kerr, C.S. : Studies of the relationship between satisfaction, goal-setting, and performance. Organizational Behavior and Human Performance. No.5, 135-139 ; 1970
- 15) Locke, E.A., Sirota, D., Wolfson, A.D. : An Experimental case study of the successes and failures of job enrichment in a government agency. Journal of Applied Psychology. No.51, 701-711 ; 1976
- 16) 宮本美砂子：やる気の心理学，創元社；31-56，1981